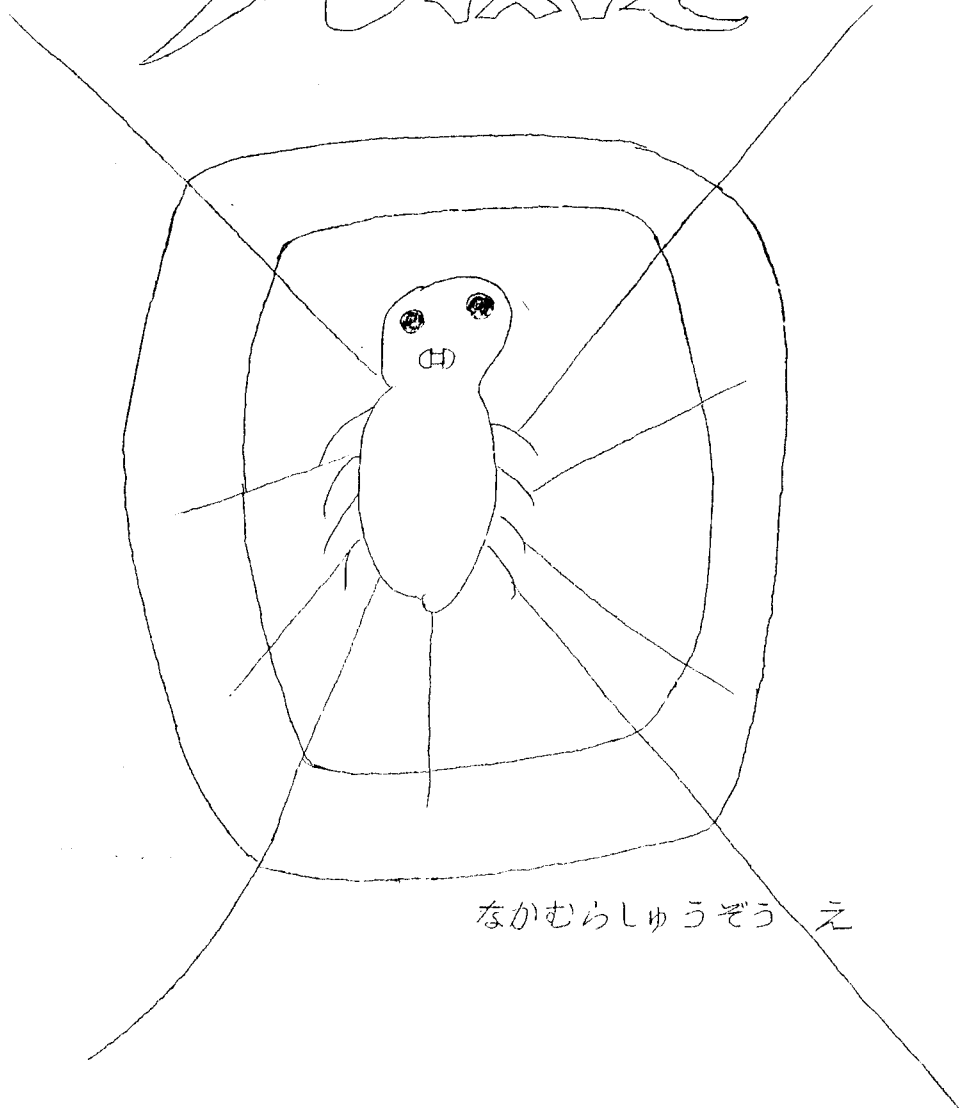


# 蜘蛛丸



なかむらしゅうぞう え

中平きよし

栄一

## 子どものかいたクモの絵

錦 三郎さんの真似をして  
2年生に、クモの絵をかいてもらった。

それを手にした時 アッと驚いた。  
次の瞬間、独りでは笑いがこみあげてきて  
アハハハ-----と笑ってしまった。

表紙の絵もその一枚である。

## 〈 ま え が き 〉

私も初めからクモが好きだったわけではない。また、それについての知識もなかった。実は、理科の教材としてクモが出てきたから仕方なく観察を始めたのである。つまり、教師としての義務感から手にしたのが、そもそものなれそめである。それから20数年ずっとつきあっている。今では、もう離れられない仲である。

少し知ってくると、誰かに話してみたくなるのが凡人の常。クモ学会の機関誌 "A+typus" や、その他の雑誌に憶面もなく駄文を草してきた。そうしたものが少したまった。

今回、それらに少し手を加えたり、新らしく書いたものを集めて、この "クモ談義" とした。

内容は、民俗に関するもの、階筆らしきもの、読後感、解説、観察記事、論文めいたもの、理科指導資料など。何の事はない片田舎の雑貨屋の店先のようなものである。

従って、読んでくださる方は、目次など無視して、ぱっと開いた処を、ごろりと寝ころんで読んでいただきたい。

何かの参考にしていただきたいなどと大それた事は言わない。時たまクスッと笑っていただければありがたい。

※ 転載したものについては、その出所を明示しておくのが当然であるが、この書名に見合う様に、題名も文章も変えたものが多いので省略させていただく。

1965年5月3日

高知市新屋敷 4

中平きよし

(1)

音叉をクモの背に近づけると、第1歩脚を高く振り上げ、他の脚では体をもちあげつまずき立って高い処にある物を探しとる様にする。中には、とびつこうとする様な態度をしたり、音叉を動かすと、それにつれて、右に左に走りまわるのも見られた。

音叉を体に触れると、すぐしがみつきの捕帯をかけたリ噛みついたり、全く獲物に対するのと同じ動作をするものもあった。

クモは明かに食餌昆虫に対する態度をとったり、敵をさける動きをしたり、或は無視する態度を見せたりしたのですこぶるおもしろかった。ただ、何体数の一番多かったコクサグモの殆ど全ては無視されたことは淋しさを乗り越えて腹立たしかった。音叉で網を搔き廻してやろうかと思ったが(時刻によって活動がちがうのではなかろうか?)と考えなおすと腹立はすぐおさまった。我ながら立派な科学的態度であると思ふといささが嬉しくもなった。

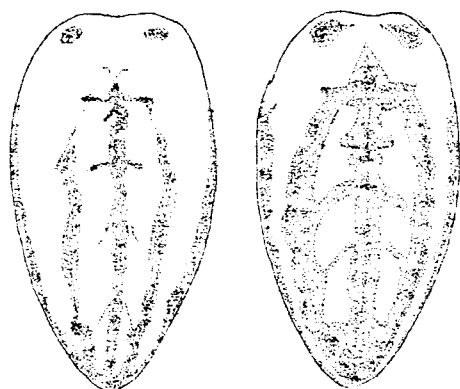
さて、コクサグモ52何体については、吉日をトシ、朝、昼、晩と3回延べ156何体について実験してみた。ところが、相変わらず反応をしない。やっとのことで2何体だけが反応してくれた。その1は、亜成体で、走り寄って音叉にしがみついた。その2は、幼体で、あわててトンネルを通過してしげみに逃げこんだ。被験体は、幼体～亜成体であったが、結局、実数にして50何体が何の反応も示さなかった。

### ＜ 体色を変えるクモ ＞

クモの中には、刺激を与えると、瞬間的に体色を変えるものがある。オオシロカネグモ、チュウガタシロカネグモ、コカタシロカネグモ、キララシロカネグモ、キイロハラダカグモ、ウロコアシナガグモ、コガネヒメグモがそれである。

これ等のクモを指先で突くとか捕えるとかすると、その瞬間、

美しい体色（正確には腹部の色彩）が汚ない色に変わるのである。この体色変化の様子から分けると、2群にすることができる。即ち、A群はオオシロカネ、チュウガタシロカネ、コガタシロカネ、ウロコアシナガ。であり、B群はキララシロカネ、キイロハラダカ、コガネヒメグモである。前群からはチュウガタシロカネグモを、後群からはキイロハラダカグモを代表として説明する。



刺激による斑紋の変化

左 自然の状態

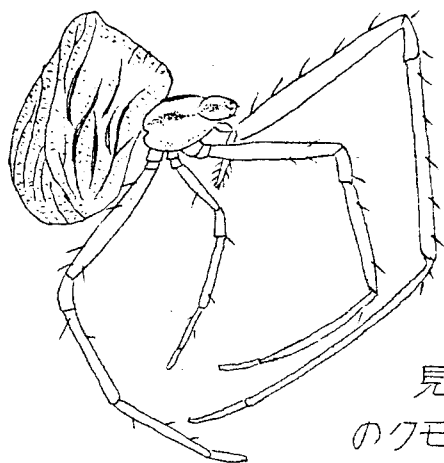
右 刺激を与えた直後

チュウガタシロカネグモ *Leugauge blanda* (L. Koch)

チュウガタシロカネ。は日当りのよい山すそや草原に円網を水平に張って生活する。銀白色の腹背には黒褐色条斑が図示したように走っている。シロカネは白銀で、それが強い日射しを受けてキラキラ輝く状はまことに美しい。

クモを刺激すると、その瞬間、黒褐色条斑は急に太くなる。しばらく放置しておくとも自然の状態にもどる。管筒にでも収容して、この体色変化を楽しむのも悪くはない。

B群に属するものの変化は、誰もが目を見張る程顕著なものである。A群のものでは、うっかりしていると、体色の変ったことを見落すこともあるが、B群では、'金色の美しいクモが……'と捕えて見た瞬間'オヤ!!間違えたかな。'と必ずあたりを見まわす程のもの。別種かと驚く程のものである。



キイロハラダカグモ

*Tyrolida striata* (Thorell)

キイロハラダカグモは、木の枝や草間に円形の網を張る。

腹部は艶のある黄色である。

光線の具合では黄金色に輝いて見える美しいクモである。B群の他のクモの和名キララ、モコガネ、もこうといった美しさに由来するものである。

さて、この黄金色の腹部は、網の枠にひろがった黒褐細線によって小さく区画されている。クモを刺激すると、この黒褐細線はぐんぐんと抜がり、またたく間に、全体が汚褐色のきたないものになる。よく見ると、汚褐色の中に、無数の金粉杯のものが散布してキラキラと輝いている。

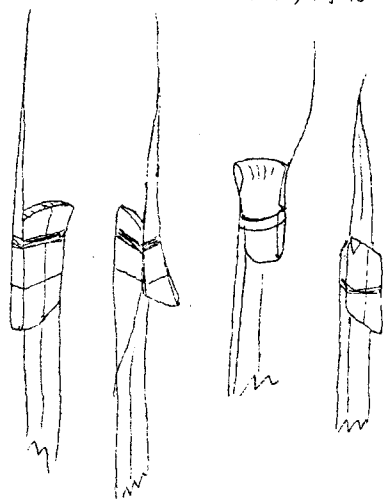
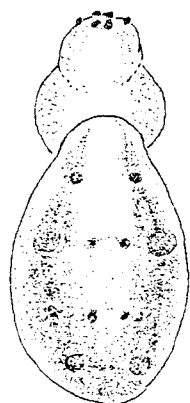
静かに見ていると、この小さな金粉は次第に抜がって、クモは元の色彩にかえる。

この美しい現象は、キララシロカネグモでもコガネヒメグモでも同じことである。驚くべきことである。ところで、同一個体を連続的に刺激していると、さっぱり変色しなくなる。これも、生物の生活を観察する者にとっては、おもしろい事の一つである。

変色の機構についてはまだ明らかにされていないようである。刺激によって生じた生理的変化が色素細胞を刺激し、その中にある色素粒を移動凝集させる。その結果、透明となった皮ふを透して体内部の色が見えるのではなからうかと想像している。

これは、まだ夢のような想像である。間違った想像であるかも知れないが。このような想像をすることも観察する者の楽しみの一つであり、誰からも奪われない喜びでもある。

〈 フクログモヤドリヒメバチ 〉



ヨツボシショウジョウグモ  
*Singa pygmaea*  
(Sundevall)  
と、その産室。

フクログモヤドリヒメバチ(中平 仮称)を私が初めて採集したのは、'62. 9. 4. 高知市南夕方に於て採集したヨツボシショウジョウグモの産室からであった。

ヨツボシ. は、水田や路傍の草間に円網を垂直に張って生活する小型のクモである。

体長、♀4mm 内外、♂3mm 内外。全体光沢あり。背甲褐色。個体により暗褐斑あり。胸板黒褐~黒色。腹部卵形。腹背は、幼ないものは白黄色の地に黒点2対あり。(和名はこれに因む) 成長すると、全体赤褐色のもの、褐色の地に中央と両側に白~黄色条のあるものなど変異が多い。年2回発生。♀は幼体、♂は亜成体~成体で越冬。5~6月産卵、それより発生したものは8~9月産卵。これより発生したものは草むらの根元などで越冬。産卵に当っては、イネ・子ガヤなどの葉先を折り曲げて長さ5~6mmの産室を作る。卵数20~25。産卵後、産室の外側を糸でてい

葉の先